

施設は今

細井俊明

(竜雲少年農場長)

昭和四十年四月一日、法然上人七百五十年遠忌、親鸞上人七百年忌、記念として先代明誓によって造られた精神薄弱児施設竜雲学園は、昭和五十一年四月一日に、精神薄弱者更生施設竜雲少年農場、昭和五十二年四月一日より精神薄弱者通所受産施設竜雲かしのき園を生みつつ、今日に到り、百十名の園児、園生の、生活、指導、人生の場としながら色々な日々を送ってきた。

香川県高松市南郊に、大きな池に囲まれ、遠目には、古墳のようでもあり、城塞とも見える山寺は、法然上人二十五霊場二番札所仏生山来迎院法然寺。竜雲学園と、竜雲かしのき園はこの巨きすぎるほどの境内にある。竜雲少年農場は、ここから、さらに南へ、約二十キロ、阿讃山脈の北麓にあり、

峠を越えて、阿波領へ抜けると、大河、吉野川の流れ。その彎曲部に、夏、春、高校野球連覇の池田高校がある。讃岐にある精薄施設の紹介に、わざわざ、阿波分の池田高校が出てくることに、ポパイ軍団への熱狂、過熱をお汲みとりいただければと思う。讃岐は古来、大陸との交易や産物の豊富、災害の少ないこと等、豊かであり人情は厚く、おおらかである。それを含めて学園の園児、園生職員共々に、その氣質を受けている。児童施設の竜雲学園児は、世の子供達が過去へ置き忘れた野趣を多分に発揮し、寺の境内を賑わしたり騒動を興してくれる。今は改修も進み境内の見通しもよくなったが、山頂へ到る諸堂の一部は、犬小屋に改造されたり、改修なった重文クラスの鐘樓の欄干が、ノコギリ訓練の場になっ

て、寸断されたり、献灯ろうそくがびっしり灯されたり、笑
い事では済まぬ場合が多発する。しかし、マイナスは常にプ
ラスへ転化することく、竜雲かしのき園の職種が、花の栽培
であるため、四季欠かさず、全山の御堂、歴代墓地に生花は
供わっている。

通所受産施設とは云へ、家からマイクローバスで通ってくる
人は、施設入所者と異なり、両親、家族と共に暮す理想を支
えとしながらも親が本人に甘く、肥満、運動不足が多く、巨
きなおにぎりのような体で、高い石段を登り、花を活けてく
れる姿は、真剣な後ろ姿であり、活け終ると、「がっちゃん」と
と声を掛けあい祈る姿は教えずして、覚えたものである。

昭和四十三年夏、信州長野の善光寺さんで浄土宗スカウト
リーダー講習会があり、その帰路、牧達雄先生に連れられ登
った鉢伏山山頂で出逢った、山草のお花畑を裸馬で疾駆する
ダウン症の少年と、放牧中のジャージ種の乳牛を動機に始め
た竜雲少年農場の構想は五十一年、五十名定員の成人更生施
設として始まり、三〇ヘクタールの山林を、園生の手と足で
伐採、日本芝の植付と、山地酪農方式の手順で次々と進めて
行き、手造の牧野には搾乳牛、一〇頭。育成牛、一〇頭、ホ

ームスパン用、羊五頭、鶏、うさぎ、鶯鳥と、小動物園を呈
している。中でも乳牛の放牧は朝、夕、乳牛が、搾乳所へ自
分で帰ってきて、乳搾りが済むと、又、山へ帰ってゆく。年
功序列があり、牛の並ぶ順が、一つ違っても大騒ぎになる。

私など、どの牛も皆、同じ、黒白のホルスタインとしか見え
ないが、園生は、もちろん、それぞれに、自分好みの名を付
けている。搾る牛も、一人一頭、重度といわれて、I・Q測
定不能の人も、上手にこなしている。設立当初、乳牛の放牧
が、ここ迄、この人達に合うとは、正直思わなかったが、更
生施設の重度と老齡化、長期滞留の通例化の精薄者施設であ
りながら、少年農場近辺の休耕田への、牛糞の投入耕運から、
蔬菜作り、山地伐採中から、くぬぎを選別し、「しいたけ」
作り、又、搾乳の乳を各自、ふんだんに飲む為、頑健な体
になり、昭和五十七年、二十名増員の為、現在員、六十二名中、
家庭が勇氣を持ち、家庭からの通所授産、ミニ作業所、職場
開拓を推め、通勤寮を備えれば、半数の三十名を有に越える
園生が社会に出てゆくことになる。自然の中での人間の快適
な生活環境、酪農、園芸、蔬菜作業職種に見る、第一次産業
の農業における、知恵遅れの人々の職種や生産効果はまだま

だ抜く、充分に活動の余地がある。又、小動物園化した農場は、固めの時期に入った為、美観に力を入れ、社会全体への解放により、特に、幼児や、小学生の家畜や家禽への親和性を高め、見て、触って、遊んで、飲んで、体全体で分る農園にして、知恵遅れ児者の日夜味わっている素晴らしい、人生の一端を社会の人達に、味わってほしいと思っている。これが、施設の社会化であり、地域の活性化、地域交流であり、糸賀一雄先生が、この児らを世の光にと唱えられて二十年の歳月を経たが、今はその光も恒常的な光になりつつある。

さて、施設内で順調に伸びて来た園生も、これから、社会で暮す為には、施策の上からも、設備その他の面からも、多くの超え、越えねばならないハードルがあるが、世の中のスピード化は施設の経営にも激しく及び、当学園の持つ、肉体、精神の治癒力を見込まれたのか、戸塚ヨットスクールと変らぬ入所者の申し込みが続いている。I・Q・50、家庭内暴力、二十一歳男子、大人しくて、やさしい風貌、最初の面会日、こんなところへ入れたと訪れた父親の頭を隠し持った「いわた」(大きな目の石)で一発がつんとやり、父は跳んで帰ってしまった。夕方家へ電話し、お父さんさっきは、ごめんなさ

い、今度はしませんから又、面会に来て下さい。と、ここにこしていた。

I・Q・70、三十五歳、独身男子、月収、二十万。

酒好き、パチンコ、その他色々。仲間と連れだって、一晚に何軒も、はしごし、付けは、家へ廻す。家庭が耐えきれず入所へ。仕事力抜群。「施設は今……」というタイトルを付ければ、重度、重症測定不能から、このような人迄、学園内の協同生活に、不測の事故の起らないのが、不思議だろう。北海道は東の果て、標津に、農場を作ったが、医師と薬に頼ることをうんと少くし、戸塚ヨットスクールと正反対の指導や対応をし、(時々職員が撲られる。私も二の腕を噛まれた。)各種受け皿施設を次々と作ってゆく、面白く、楽しい明日が来るよう頑張りたい。

さて昭和三十八年、兄の経営する大照学園を退職し、四国へ帰って精薄児施設設立後の今日迄、数えきれぬ多くの方々のお世話になり、今日に到ったが、その内容の一部は十五周年に記し、五十年代以後は、昭和六十年刊行予定の二十周年に記するつもりだが、学園に関する諸々についてソフトの方も、ハードの方も何とかこなせる職員が増えました。こ

これらの人達と、充分、練りに練って、検討に検討を重ねて、行き詰った、福祉の前途に処したいと思う。今、中央、地方を問わず、障害者の問題を視る時、精薄児・者の問題は、身体障害者の問題提起に比べて、弱くなっている。長期行動計画も提言され、前途は、模索されているが、中央へ行き、印刷物になり、会議の机上に置かれると、観念的な難かしい言葉の羅列になり力の弱いものになってしまう。企画、提言のマイナス面を恐れるあまり、プラスへのダイナミックさに欠けるのではなからうか、現実の仕事場は、非常な危険に溢れているが、逆に、プラスへの転化の力を充分秘めているものと思う。浄土宗の寺院の福祉活動の一端で、現場に没入しているものにとって、仏教大学の福祉学科、浄土宗の社会福祉事業協会は、暗夜の光明に等しいものである。

同宗の誼をもって、諸々の研究成果を末端にお流し下さることを切望します。